いつわりの真心――『孟子』万章上篇所掲、舜の兄弟愛をめぐる明末人士の解釈から――

はじめに

①『孟子』万章上篇（書き下しは、金谷治『孟子』（下）朝日新聞社中国古典選、一九五九、による。ルビ等の一部は改変）

万章曰わく「父母の、舜をして廩を完わしめしとき、階を捐ててちちの瞽瞍は廩を焚けり。井を浚えしめしとき、出でんとすれば従りてこれを揜えり。（舜の）おとうと象は曰わく『あにの都君を蓋（害）うことを謨りしは、咸なわが績なり。牛羊は父母に、倉廩も父母に、干戈はわれに、琴もわれに、弤もわれに、二りの嫂にはわが棲を治めしめん』と。象は往きて舜の宮に入りしに、舜は牀に在りて琴ひけり。象は『鬱陶くしてあに君を思えるのみ』といいて忸怩たれば、舜は『これこの臣庶、汝それわが于にこれを治めよ』といえりと。識らず、舜は、象の将に己れを殺さんとせしことを、知らざりしか。」

〔孟子〕曰わく「なんすれぞ知らざらん。象が憂うれば亦た憂え、象が喜べば亦た喜ぶのみ。」〔万章〕曰わく「然らば**舜は偽りて喜べる者か。**」曰わく「**否。**（中略）故に君子は欺くにその方（道）を以ってすべきも、罔すにその道にあらざることを以ってしがたし。彼は兄を愛するの道を以って来たる。故に誠に信じてこれを喜びしなり。なんぞ偽らんや。」

②溝口雄三『中国前近代思想における屈折と展開』（東京大学出版会、一九八〇）上論第一章「明末を生きた李卓吾」（初出一九七一）56/57頁

さて、李卓吾はこの話について、舜が偽って喜んだのではないと孟子が言うのは正しくない、と評している。「もし孟子の言のごとくならば、舜は象が己れを殺そうとしたのを知らなかったことになる。これは不智だ。相手が己れを殺そうとしているのにこれを喜ぶというのは、殺しを喜ぶこと、これは不誠だ」と彼はいう。では舜がなぜ喜んだのか。「……」（**本報告資料第二節所引①「与友人書」波線部分**）と彼はいうのである。

「舜は象が自分を殺そうとしているのを知らなかったわけではない。しかし象が憂えるのを見れば自分も憂え、喜ぶのを見れば自分も喜ぶ。きょうだいの情愛には、抑えようとしても抑えることのできないものが、おのずから存している」（溝口著の引用は書き下し文、三浦の現代語訳）と朱子は註し、「**人間の感情としても天の道理としても、この境地における在り方を極致とみなす**」（同前）と程子はいう。孟子とほぼ同軌の程朱のこういうみかたは、象の糊塗はもとより舜の偽喜も認めない点で一見リゴリスティックにみえて実は一面なかなかに牧歌的である。**人間悪に対するみかたが単彩だ**ともとれる。兄弟愛を標榜しさえすれば加害も被害もいっさい氷解すると信じているかにみえる。しかしそのような愛の標榜が通用しないほどに**善悪愛憎のアスペクトが複雑多様になった時代**には、そのような愛もしくは偽りのなさを天理の至とする考えが一つの規範となると、その規範は非現実的であることによってリゴリスティックに非人間的なものとなろう。そのような偽りのなさというのは不智であると同時に不誠であると李卓吾はいうのである。

③呂妙芬『成聖與家庭人倫』（聯經出版、二〇一七）第三章「聖人處兄弟之變」

（一）舜可能受蒙蔽：聖人不逆億――湛若水・蔡清・朱長春・陳懿典・陳龍正・劉宗周

（二）舜未受蒙蔽：聖人的智慧與教化――程頤・李元度・黄端・李贄・王陽明・羅澤南・李光地・陳際泰

④松野敏之「『孟子』にみえる聖人舜の悌心――万章上篇第二章に関する朱熹・張九成の解釈――」（『新しい漢字漢文教育』六十六、二〇一八）

一、王守仁の心学：古典の読み方に対する新たな提案

①王守仁（号陽明、一四七二～一五二八）『王文成公全書』巻三（『伝習録』巻

下第九十六条）：先生曰、烝烝乂、不格姦、本註説、「象已進進於義、不至大爲姦惡」、舜徵庸後（舜典）、象猶日以殺舜爲事、何大姦惡如之、舜只是自進於乂、以乂薫烝、不去正他姦惡（舜が堯に登用されたのちにも、象はなお毎日、舜を殺そうとねらいつづけており、実にこれ以上の姦悪はないほどであった。だからここは、舜自身が義にすすみ、その義によって象を感化しようとはしたが、しかし象の姦悪をただそうとはしなかった（と読むべきであろう）。）、凡文過揜慝、此是悪人常態、若要指摘他是非、反去激他悪性、舜初時致得象要殺己、亦是要象好的心太急、此就是舜之過處、經過來乃知功夫只在自己、不去責人、所以致得克諧、此是舜動心忍性、增益不能處（そもそも自分の過失をごまかし、悪事を覆い隠そうとすること、これが悪人の一般的態度であるから、もし象の是非を指摘しようものなら、逆にかれの悪逆な性質を呼び覚ますことになる。舜がはじめに、象から自分が殺されそうになる事態を招いたのも、象を善導しようとする気持ちがあまりにも性急だったからだ。この点はまことに舜の失敗であった。舜はそれを経験することで、ふだんの努力は自己陶冶にこそ注ぐべきだと気がつき、他人を責めなかった。だから、お互いに和やかな状態を実現することができた。この過程こそが、天が舜に対し辛い思いをさせて、できないことをできるようにさせた、ということなのである。）、古人言語俱是、自家經歷過來、所以説得親切、遺之後世、曲當人情、若非自家經過、如何得他許多苦心處。

②『伝習録』巻下第四十五条：一友常易動気責人、先生警之曰：「学須反己、若徒責人、只見得人不是、不見自己非、若能反己、方見自己有許多未盡處、奚暇責人、舜能化得象的傲、其機括只是不見象的不是、若舜只要正他的奸悪、就見得象的不是矣、象是傲人、必不肯相下、如何感化得他」（「学問は、まず、己を省みることでなくてはならない。もしいたずらに人にもとめるだけだと、人のよくないところばかりが目について、自分の非には気づかないままだ。もしよく己を省みることができれば、その時は自分の数多の不十分さが目につき、とても人を責めている暇などない。舜が、象の驕慢さを変化させることができたその秘訣は、何よりも、象の不正を見ないということにあった。もし舜が、象の邪悪の矯正にひたすら打ち込んでいたら、いきおい象の不正が目につくことになる。さすれば象は驕慢な人だから絶対に舜には従わなかったはずだ。どうして彼を感化できただろうか。」）、是友感悔、曰：「你今後只不要去論人之是非、凡嘗責辨人時、就把做一件大己私克去方可」。

◎聖人舜による「失敗」挽回行動の分析とその追体験。

③『伝習録』巻上第三条：先生曰、心即理也、天下又有心外之事、心外之理乎（先生は言われた、（今ここに具体化している）心が（この場のすじめとしての）理にほかならない。この世界に、そうした心を脇に置いて成立する主客関係などありえないし、実現される理などもないだろう。）。

◎ともに可塑性を有する「心」と「理」との相関

二、李贄と焦竑：万暦人士における陽明学の実践

①李贄（号卓吾、一五二七～一六〇二）『焚書』巻二「与友人書」：古聖之言、今人多錯會、是以不能以人治人、非恕也、非絜矩也（いにしえの聖人の言葉について、今の人士はひどく誤解している。だから人が人を治められず、「恕」でもなく「絜矩」でもないのだ。）、試舉一二言之、……乃孟氏謂、舜之喜象非僞喜、則僕實未敢以謂然、夫舜明知象之欲己殺也、然非眞心喜象、則不可以解象之毒、縱象之毒終不可解、然舍喜象無別解法矣、故其喜象是僞也、其主意必欲喜象以得象之喜、是眞也非僞也（しかし孟氏は言った、舜が象（の来訪）を喜んだのは偽りの喜びではないと。だが僕はといえば、そんな風には考えない。そもそも舜は、象が自分を殺そうとしているのをはっきりと知っていた。しかし「真心」から象の来訪を喜ぶのでなければ、象の憎悪をとかすことができないし、たとえ象の憎悪が結局はとかせなくとも、象の来訪を喜ぶ以外に、別の解決方法はなかった。だから象の来訪を喜んだのは偽りだが、その意図は、象の来訪を喜ぶことによって象の喜びを獲得しようとしたのであり、それ自体は舜の真の気持ちであって偽りではない。）、

若如軻言、則是舜不知象之殺己、是不智也、知其欲殺己而喜之、是喜殺、也是不誠也、是堯不知朱之嚚訟、孔不知鯉之癡頑也、不明甚矣、故僕謂舜

爲僞喜、非過也、以其情其勢、雖欲不僞喜而不可得也（だから僕は思う、舜が偽りの喜びを発したのは（舜にとって）過ちではないと。この場の情況や成り行きのなかでは、喜びを偽装すまいと望んでも、それは出来ない話だった。）、以中者養不中、才者養不才、其道當如是也、養者養其體膚飲食衣服宮室之而已也、如堯之於朱、舜之於象、孔之於伯魚、但使之得所養而已也、此聖人所以爲眞能愛子與悌弟也、此其一也。

②（伝）李贄『四書評』孟子卷五：舜之喜、謂之非僞喜、便矯性情、但其僞處、正與言必信、行必果、硜硜然小人（論語子路：朱註：果必行也、硜小石之堅確者、小人言其識量之淺狹也）不同耳、此所以終收底豫之化也與（舜が喜んだことについて、それを偽りの喜びではないと言ってしまうと、ひと（舜）の気持ちをねじ曲げることになる。しかし彼が偽るその場面は、「言ったことは必ず守り、行動は必ず最後までという、こちこちの小人物」によるものとは異なる。これが、瞽瞍でさえも満足するようになるという感化を、舜が最後には手に入れることになった理由なのである。）。

◎個別の場面に相応しい「真実」の徹底追究、「柔軟」な思考態度。

③焦竑（一五四〇～一六二〇）『焦氏四書講録』下孟巻十二「曰然則舜僞喜一節」：校人欺子産、與象欺舜不同、魚既烹而云舍之、無迹可見、欺之誠是也、欲殺兄而云愛兄、其迹已露、將誰欺乎、但聖人之心、只以天親爲重、故從前之事都不計較耳（象は兄を殺そうとしながらも兄を愛すと言った。その悪逆な痕跡はすでに露呈しているのだから、いったい誰を欺けるだろうか。しかしながら、聖人の心は、血を分けた親族をひとえに重視するものである。故に以前の出来事について思いをめぐらすことなどまったくないのである。）、……。○陽明子曰、舜之喜象、固是自然而然者、亦是不責備象要他爲善之意（陽明先生は言った、舜が象に対して喜んだのは、まことに、おのずからそうであるようにしてそうしたのであり、それはまた、象に対し善をおこなうよう責め立てないとの意味でもある。）、……、

一旦象欺我以其方、若又責備他欺我、他的惡性定又激起來、故信而喜之者、正是舜動心忍性、增益其所不能處、亦是舜與人爲善、成就象的美處（ひとたび象が自分に対し、道理にかなった方法を使って欺こうとしているのに、もし以前と同じく、自分を欺こうとしているとして彼を責めたならば、彼の悪逆な性質はきっとまた呼び覚まされるだろう。だから信じて喜ぶことこそが、まさしく「舜動心忍性、増益其所不能處」であり、同時にまた舜が他人とともに善をおこない、象の美点を成し遂げさせたということなのである。）、此等若心微意■者、可不勘破。

◎個別的場面における修己と治人の同時実現

三、方大鎮と王夫之：明末における思潮の展開

①方大鎮（一五六三～一六三一）『荷薪義』巻五第十六葉「答舒城社友李潔甫井廩問」：假令舜而知父與弟之必殺己也、又知廩與井之爲殺機也、陽以應其命、陰以敵其鋒、挾両笠以求全、先旁空而覬出、則是示其親以必不能殺而與之鬬智、又示其身之必不可殺而與之鬬勇（かりに舜が、父と弟が自分を必ず殺すだろうと知っていたならば、くらや井戸が謀殺のからくりであることもまた知っていたはずであり、表向きはかれらの命令に従いながらも、その毒牙に対しては密かに抵抗策を立て……。しかしそれでは、親に対し、自分を絶対に殺すことは出来ないことを示して智慧を競うことになり、また、自分が絶対に殺されるはずのないことを示して果敢さを競うことになる。）、人子之身、父母出之、父母死之、東西南北、惟父母之命、而故藏鬬勇鬬智之意于骨肉顔面之間、此伯奇申生以下之所不爲、而謂大舜爲之乎、

舜惟知有父母之当順也、井與廩之命之当從也、而亦不問火之所自起、井之所自蓋也、故見瞽瞍則喜、見母則喜、見象則喜、熙熙然相忘於孔懐同氣之愛也、豈因其鬱陶思君之言、以愛兄之道來而後喜之耶（舜はただ、父母には従順であるべきこと、井戸やくらに関する命令にも服従すべきことをひたすらわきまえ、火事発生の原因や井戸が蔽われた理由などはもはや問わなかった。だから瞽瞍を見ても、母を見ても、象を見ても喜んだ。和やかな気持ちのまま、それ以前の一切の顚末については、兄弟という気を分け持つ者同士の愛情のもと忘れ去ったのである。どうして、象の「鬱陶思君」といった言葉や、兄を愛する道理に依拠して来訪したことを理由に、その結果として象を喜ぶことなどがあるだろうか。）、……、

可欺以其方、難罔以非其道二語、但可以評子産之待校人、而不可以評舜之待象、父母之不我愛、於我何哉二語、但可以表公明高之意、而未可以表舜之心、**總之天性之親、無所容其計較、一体之脈、無所容其喜怒也、故人子不幸而處舜之境者、亦曰希舜之忘而已矣**（要するに、天命のもと親族となった者に対しては分別を差し挟む余地などなく、気を同じくする血族には喜怒の感情を差し挟む余地はないのである。**それ故、人の子で、不幸にして舜の如き境遇に対処しようとする者にも、舜の如き絶対的忘却の態度を願うだけだ、と言うのである。**）。

◎「現場」への集中→「忘」の強調、「脱」因果論的態度

②王夫之（号船山、一六一九～一六九二）『四書訓義』巻三十三「孟子九」：**父子兄弟之際、亦至難言矣、均爲天性之愛、而孝子之於父母、仁人之於兄弟、則又有不一致者、要以求此心之安而已**（親子兄弟の間柄に関しては、やはり極めて語りにくい。親子と兄弟どちらも等しく天与の本性としての愛ではあるが、孝子がその父母に対するのと、仁者がその兄弟に対するのとでは、一致しないものがやはりある。しかし要は、みずからの心が安らぐことを求めるだけだ。）……、**禮者人子之自盡、而心者孝子之所以安親、舜不但盡諸己、而且曲成乎親、此其所以爲孝子之至也**（礼とは人の子がみずからを発揮する形式であり、心とは孝子がその親を安心させるうえでの根拠である。舜はその心をみずからに発揮しただけでなく、その親にも事細かに実現させた。これが、舜が孝子の極致とされる理由である。）、……、

孟子曰、此豈待舜揣度而知者哉、象之惡已不可揜、而舜奚不知也、不知而何以免於焚與揜也、惟其知之、而仁人之心於此別矣、舜之於象、自盡其爲兄之心而已矣、故象之辭若有憂焉、又若有喜焉、其憂也、觸乎舜心之憂而與之俱憂焉爾、其喜也、觸乎舜心之喜而與之俱喜焉爾、前之不軌之謀、應念而釋、此之相感之幾、隨念而生、舜惟知我之憂喜與共者、乃兄弟必至之情、而象之順逆、不在其意中也（孟子が言った、これは、どうして舜の揣摩憶測を経てはじめて知るようなことであろうか。象の凶悪さはすでに覆い隠すことができないのであり、舜がどうして知らないでいるだろう。知らずにいてどうして、くらを焼き井戸をふさいで殺されそうになることから免れるだろう。思うに舜はそれを知っていた。だが仁者の心は、この点において一般人とは異なるのだ。舜は象に対し、みずから兄としての心を発揮し尽くすだけであった。だから、象の言葉には憂いがあるかの如く、また喜びがあるかの如くであった。**その憂いは、舜の心の憂いに触発されてともに憂えたものであり、その喜びは、舜の心の喜びに触発されてともに喜んだものである。それ以前の、象による常軌を逸した企みは、感情の発現にしたがって溶け去り、この場での感応のきっかけは、感情の発現にしたがって生まれた。舜はただ、自身の憂いや喜びのともにする感情が、まさに兄弟において必然的に到達する感情であることを知っていただけであり、象の従順さや反逆などは、その意中に存してはいないのである。**）、

……、昔雖知其將殺己、而今固以其道來矣、或者昔所知之未眞乎、或者其有悔心乎、舜於此不容深計、而象既喜、我不與之俱喜、則是我友愛之心反薄也、誠信而喜之、所以待弟之道盡、所以待弟之心安、**澹然相忘於恩怨之地、而又何僞焉、而仁人之心有不可以私意測者、於此極矣**（かつて舜は、象が自分を殺そうとしていたことを知っていたが、しかし今、象はたしかに正しい道理にもとづいてやって来た。或いはかつての認識が真実に反していたか、もしくは象に悔悟の念が起こったのか、舜は、その点について深く考えることを求めず、逆に、象が喜んでいる以上、自分がともに喜ばないならば、それでは我が友愛の心は、かえって薄れてしまう、と捉えた。まことに信じて喜んだ。だから弟に相対する道は発揮し尽くされ、弟に相対する心は安らかとなった。**恩愛や怨恨の地平において、そうした感情をおだやかに忘却している以上、そこにまたどうして偽りがあろうか。仁者の内面に、私意によっては推し測れないもののあること、ここに極まりである。**）、……、**若其於兄弟也、則俱受於父母而既分矣、分之而欲合之、合之者在我而已、不問其爲誠爲僞、而我盡其誠耳**（兄弟の場合は、父母からともにその気を受け継ぎ、しかも分け持っている。分かれていれば合わせようと思うわけだが、それを合わせるのは自分以外にない。相手が本心か虚偽かは不問に付し、自分がその誠を尽くすだけなのだ。）。

◎感応の場における絶対的忘却、「気の思想」の一展開。

おわりに

以上